

治療

## 口腔内崩壊錠の意義

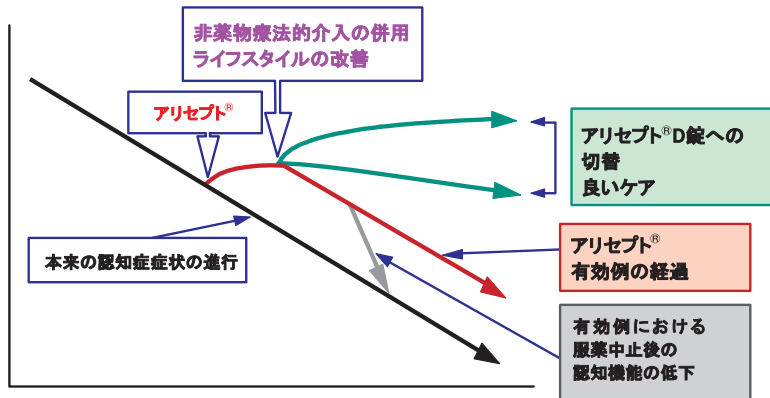
浦上 克哉

### 塩酸ドネペジルの有効性

アルツハイマー型認知症治療薬として本邦で現在使用可能な薬剤は塩酸ドネペジル（商品名・アリセプト<sup>®</sup>）しかない。この現状の中、臨床医に求められることは、この薬剤をいかに有効に使用するかである。自験例での有効性をまとめると、49%（21例）に改善が見られ、不変が35%（15例）、悪化7%（3例）、中止9%（4例）であった<sup>1</sup>。この結果は、国内におけるその

他の報告とも一致している。改善例の中には、行きつけの店へも買い物に行けなくなった70歳代半ばの女性が、塩酸ドネペジル内服により忘れずに覚えていくことが多くなっただけではなく、幼稚園の先生をしている娘さんの仕事の手伝いをきちんとできるようになった著効例もある。また、現在、塩酸ドネペジルは軽度から中等度のADに適応となっているが、高度な症例でも有効例がある。われわれは会話がほとんど咬み合わなくなった例で、塩酸ドネペジルの投与により意欲的となつて会話の内容も咬み合うようになり、さらに絵を描けるようになった症例を経験した。最初は色を塗りつぶすだけであったが、次第に線が書け、次いで丸が書けるようになり、形を成すようになった。その後、3年を経過した現在も絵を続けて描いていて、しかもクレヨンから絵の具へと使う道具にも進歩が見られている<sup>2</sup>。しかし、図①のごとく、実際約1年程度を経過してくると徐々にもの忘れが

# ①アルツハイマー型認知症の臨床症状の経過と期待されるアリセプト®の効果



高橋智ら：臨牀と研究、77(6)、1084(2000)を一部改変

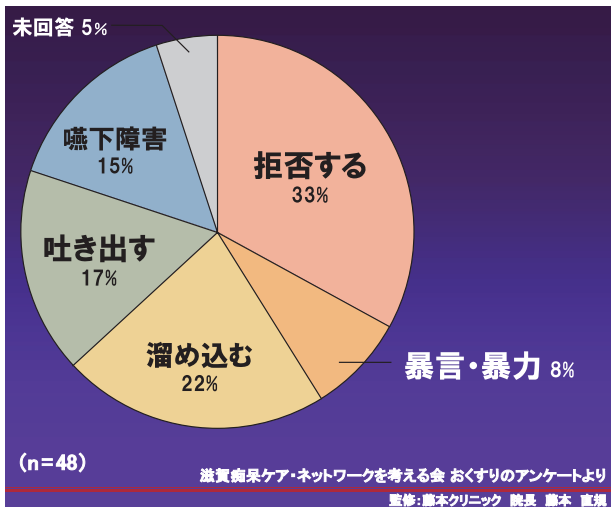
増えてくる。

## アリセプト®D錠の意義

有効に使うための一つの手段として挙げられるのが、口腔内崩壊錠であるアリセプト®D錠の処方である。アリセプト®D錠はアルツハイマー型認知症患者さんの服薬支援を目的に、「つまみやすさ」「飲み込みやすさ」などの工夫がされている。実際にアリセプト®治療中に、図②のごとく服薬ができていないケースは意外と多い。

外来通院中のアルツハイマー型認知症の患者さんで症状が悪化してきて、家族から「何か他に有効な薬はありませんか？」などとよく相談を受ける。その際、詳しく服薬状況を確認してみると薬の飲み忘れや薬が内服できていないことが分かることが少なくない。理由は、図②のように服薬を拒否する、薬を口の中に溜め込む、そして吐き出してしまふ、などが多い。医師が思っているほど、患者さんの薬のコンプライア

## ②服薬援助の困った経験はどのような場合ですか



ンスはよくないのである。また、もの忘れの症状が増えて、そのために薬を飲み忘れる、そしてさらにもの忘れが増えるという悪循環に落ちているケースもかなりある。そこで、一つ

の方法としてアリセプト錠からアリセプトD錠への切り替えが考えられる。アリセプトD錠に切り替えてから初めて家族から「実はこれまであまり薬がきちんと飲めていなかったんです。後から飲むと言ってそのまま飲み忘れていたり、口に入れても飲み込まず溜め込み、自分が見ていないところで吐き出したりしていたようなのです。アリセプトD錠に切り替えていただいで、口に溜め込んでいてもそのまま溶けるし、とてもよくなりました。」と話してくださることがよくある。それまでのコンプライアンス不良な状況を、実は遠慮して(？)医師に伝えていないことがよくあり、変更して初めて気づくことが多いことに驚く。このため、アリセプトD錠への切り替え後にまた症状が改善してくることをしばしば経験する。アリセプト錠の処方で症状が悪化している患者さんに、アリセプトD錠への変更は試してみただきたい方法の一つである。

中村らは、アルツハイマー型認知症患者さんと介護者にアリセプト<sup>®</sup>D錠の服薬感についてアンケート調査を行い、44%が「服薬しやすくなった」と回答し、100%が「今後も服薬を続けたい」と答えたと報告している。今井らはアリセプト<sup>®</sup>D錠を利用することで、介護者家族の負担を軽減する可能性を指摘している。<sup>4</sup>

## おわりに

いま臨床医は認知症診療において、使用可能なアリセプトをいかに、少しでも有効に使うかが問われている。また、その努力はきたるべきアルツハイマー型認知症の根本治療薬が使用可能になったときに大きな力になると考えられる。セクレターゼ阻害剤やアミロイド 蛋白のワクチン療法などが開発の最先端を行っているが、これらの開発状況を見ていると本当に近い将来に使用可能となると思われる。アルツハイマー型認知症は「不治の病」から「治療可能な病気」

へと大きく変貌しようとしている。多くの臨床医の先生方に認知症診療に関心を持っていただきたいと考える。

(鳥取大学医学部 教授 保健学科・

生体制御学講座・環境保健学分野)

## 文献

- 1) 浦上克哉、涌谷陽介、中島健二・アルツハイマー病における塩酸ドネペジル(アリセプト<sup>®</sup>)の使用経験、絵の描けるようになった著効例の報告、新薬と臨床、37、1087～1091(2000)
- 2) 浦上克哉ら・アルツハイマー病における塩酸ドネペジルの有効性とアセチルコリンエステラーゼ及びアセチルコリンエステラーゼ遺伝子多型との関連の検討、内科専門医学会誌、14、424～428(2002)
- 3) 中村祐ら・アルツハイマー型認知症患者における口腔内崩壊錠の意義 OD錠アンケート結果より、日老精医誌、17、332～336(2006)
- 4) 今井幸充・痴呆性高齢者の在宅服薬管理と介護負担の関連について、治療、87、433～442(2005)